

# 2018年『太平記』現代語訳

侍従帰りて、「かくこそ」と語りければ、武蔵守師直は

侍従が帰って、「このよう(な女房の反応でした)」と語ったところ、

いと心を空に成して、「たび重ならば情けに弱る「何度も(求愛を)重ねたら、情にほだされることもあるだ

こともこそあれ、文をやりてみばや」とて、兼好と兼好法師と

ろし。  
手紙を送ってみたい

言ひける能書の遁世者をよび寄せて、紅葉襲の薄様もみぢがさね こすやう

言った達筆な隠棲者を呼び寄せて、  
紅葉襲の薄手の紙で、

の、取る手も燻ゆるばかりに焦がれたるに、言葉を言葉の限りを

取る手も香りが立ち上りそうなほどに香が焚き染められた紙に、

尽くしてぞ聞こえける。返事遅しと待つところアに、

尽くして(女房に師直の恋心を)申し上げた。(師直は)「返事が遅い」と(思っ)待っているところ

使ひ帰り来て、「御文をば手を取りながら、あけてア

に、使いが帰って来て、「(女房は師直様からの)お手紙を手取るけれども、開けて見ること

だに見たまはず、庭に捨てられたるを、人目(私は) 他人の目に見せにかけ

させなからず、  
庭に捨てなされたので、

じと、懐ぶとんに入れ帰りまゐつて候ひぬる」と語りけ

ないようにしよう」と(思っ)、「懐に入れて帰参しました」と語ったので、

れば、師直大きに気を損じて、「いやいや物の用に何の役にも

師直はたいそう機嫌が悪くなって、「いやはや、

立たぬもの手書きなりけり。今日よりその兼好今日からその兼好法師は、

立たない者は、  
達筆な者であるなあ。

法師、これへ寄すべからず」とぞ怒りける。「(こ)近寄らせてはならない」と怒った。

きんよし

かかるところに薬師寺次郎左衛門公義、所用の事  
このような(状況の)ところに、師直の家来で歌人の公義が、  
用事が合って、

有りて、ふとさし出でたり。師直かたはらへ招い  
不意に現れた。  
師直は(公義を)側に呼び寄せて、

て、「ごまごまに、文をやれども取つても見ず、  
「ごまごま」  
恋文を送つても、取つて見ることもしない、

けしからぬ程に気色つれなき女房のありけるをば、  
けしき  
異常なほどに  
態度が冷淡な女房がいたのだが、

いかがすべき」とうち笑ひければ、公義「人皆岩木  
いはき  
どうするのがよいか」  
と笑ったところ、  
公義は 「人は皆岩木ではなく  
なび

ならねば、いかなる女房も、慕ふに靡かぬ者や候ふ  
情があるので、  
どんな女房も、(自分を) 恋慕う者になびかない者がございましょうか。いや、なびく

べき。今一度御文を遣はされて御覧候へ」とて、  
はずです。もう一度、  
手紙をお送りになつて「らんなきいませ」  
と云つて、

師直に代はつて文を書きけるが、なかなか言葉はな  
かえつて(和歌以外の) 詞書はなく  
師直に代わつて手紙を書いたが、

くて、  
て、

返すさへ手や触れけんと思ふにぞ  
あなたを書いてくれた手紙ではなく、  
突き返した手紙でさえ、  
(恋しいあなたの) 手が触れたのだろうか

わが文ながらうちも置かれず  
ウ  
と思うので、自分の手紙だけれども、  
(適当に) ちよつと置くこともできない  
(ほどあなたが愛しい)

押し返して、仲立ちこの文を持ちて行きたるに、  
繰り返して、  
仲立ちの侍従がこの手紙を持って行ったところ、

女房いかが思ひけん、歌を見て顔うちあかめ、袖に  
女房はどのように思ったのだろうか、  
歌を見て顔を少し赤らめて、  
(手紙を) 袖に

入れて立ちけるを、仲立ちさてはたよりあしからず  
入れて立ち去ろうとしたので、  
仲立ちの侍従は「さては、この機会は悪くない」と(思つて)、

と、袖をひかへて、「さて御返事はいかに」と申し  
(女房の)袖を引き留めて、  
「それでは、お返事はどのようか」  
と申し上げる

ければ、「重きが上の小夜衣」とばかり言ひ捨て  
と、  
「重きが上の小夜衣」  
とだけ言い捨てて、

て、内へ紛れ入りぬ。暫くあれば、使ひ急ぎ帰つ  
人目を忍んで奥へ入った。  
しばらく経つと、  
使ひは急いで(師直の所に)帰

て、「かくこそ候ひつれ」と語るに、師直うれしげ  
つて、  
「このよう(な反応)でございまして」と語るに、  
師直はうれしそうな様子で

にうち案じて、やがて薬師寺をよび寄せ、「この  
少し考えて、  
すぐに公義を呼び寄せて、

女房の返事に、『重きが上の小夜衣』と言ひ捨てて  
女房の返事として、  
『重きが上の小夜衣』  
と言ひ捨てて

立たれけると仲立ちの申すは、衣・小袖をととのへ  
立ち去りなされた  
仲立ちが申すのは、  
衣・小袖を調達して

て送れとにや。その事ならば、いかなる装束なり  
送れという意味であらうか。そういう事であれば、  
どんな装束であつても

とも仕立てんずるに、いと安かるべし。これは何と  
仕立てようとするのに、(私なら)とても簡単に違いない。  
これは

言ふ心ぞ」と問はれければ、公義「いやこれは  
どついう意味だ」  
と問いなされたところ、  
公義は「いや、これ(=)『重きが上の小夜

さやうの心にては候はず、新古今の十戒の歌に、  
オ  
衣」はそのような意味ではございませぬ。  
新古今和歌集にある十戒の(=)について詠んだ)歌に、  
じっかい

さなきだに重きが上の小夜衣

そつでなくてさえ、重い小夜衣の上に、

わがつまならぬつまな重ねそ

自分の妻ではない人妻と棲を重ねる共寝を行ってはいけない

と言ふ歌の心を以つて、人目ばかりを憚り候ふもの

という 歌の意味を用いて、

ひと目を気にしているだけですのよ

ぞとこそ覚えて候へ」と歌の心を釈しければ、師直

と(いう趣旨だと)思われます」

と歌の意味を解釈したので、

師直は

大きに悦んで、「ああ御辺は弓箭の道のみならず、

大変喜んで、

「ああ、貴殿は弓道だけでなく、

歌道にさへ無双の達人なりけり。いで引出物せん」

歌道にまでも、

並ぶ者がいない達人だなあ。

さあ、(褒美の)贈り物を与えよう」

とて、金作りの丸鞘の太刀一振り、手づから取り

と言つて、

金細工の丸鞘の太刀を一振りを、

(師直が)自分の手で取り出し

出だして薬師寺にこそ引かれけれ。兼好が不祥、

て 公義に与えなされた。

兼好法師の不運と、

公義が高運、栄枯一時に地をかへたり。

公義の幸運は、

栄枯盛衰が一瞬で入れ替わった。